

9日目 贄川-7.1Km- 奈良井-5.5Km- 藪原-7.5Km- 宮ノ腰-8.7Km- 福島

5月23日、塩尻のホテルを出てJR中央本線に乗り、贄川駅下車、昨日よりやや雲が多いもののいい天気、贄川宿を7時半スタート。

平沢

贄川を出て、奈良井川沿いに、JR中央本線と並行し、山道と国道19号を繰り返しながら歩いていく、最初の人家は長瀬集落、家の前の掃除をしている人と朝の挨拶を交わして通り過ぎる。その次は集落と言うよりは町となり、JRの駅もある木曾平沢。生憎道路工事をしていたが、宿場町と間違えそうな、「うだつ」のついた立派な旧家が道の両側に並び、殆どが漆器の店。ここは木曾の木工品の町で工房も並び壮観、しかも1Km近くその漆器の店が延々と続き、過当競争でつぶれないのかと気になる。



平沢の漆器の商店街

商店街を過ぎると、小学校があり、これも純木造(多分木曾檜)で、時計塔も木造、鉄筋コンクリートは体育館だけ。木造の校舎っていいなあ!

純木造の小学校

教室や廊下を裸足の小学生が走り回る光景が目につく。



奈良井宿 34番目

平沢を抜け、暫らく歩くと奈良井宿。かなり手前から奈良井宿が見え始め、今迄の宿場で見たことのない程の人だかりが見える。近づくとも中学生の団体さんで、更に外人客も多い。宿場に入ると、その理由が分かる。江戸時代の宿場そのままの建物が両側に並び、まさにタイムスリップしたかのよう。民宿をしている旧家も沢山あるようで、その旧家から出てくる人達も多い。案内図を見ると、旧家は殆ど土産物屋・食堂・民宿、つまり何らかの営業をしており、そのせいか宿場全体が生きているようで活気がある。修学旅行の中学生は土産物屋と食べ物の店に群がっている。

奈良井宿の入り口付近



奈良井宿、まだまだ奥がある



猿頭



この宿場の建物の特徴は1階の庇。建物に取り付けた横木の下に屋根板が取り付けられてあり、その横木が面白い形をしていて、「猿頭(さるがしら)」の名がある。

言われてみれば、猿が連なっているようにも見える。屋根板を猿頭に下から打ち付け、泥棒がその屋根板に乗ったら屋根板が落ちる、つまりセキュリティが目的の構造らしい。宿場の奥に、有料で見学できる民家で「櫛問屋」の中村邸があり、300円也を支払って見学。通りに面しては「しとみ戸」、2階があり中央部は吹き抜けとなっていて囲炉裏がある。

櫛問屋中村邸



中村邸の囲炉裏の前で、その横にはかまども



様々な櫛



かんざしとこうがい



裏庭には土蔵があつて様々な「櫛」を展示しており、「花魁」が髪にさしている「かんざしとこうがい」もあつた。

鳥居峠

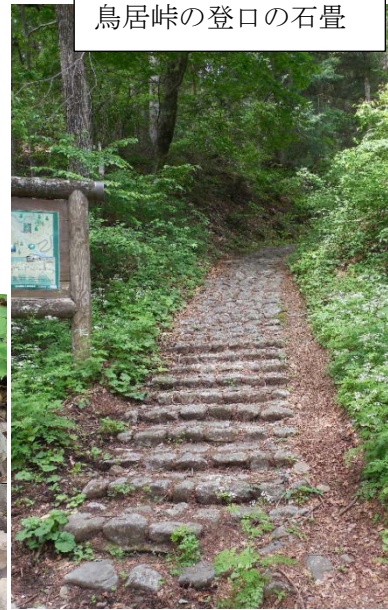
標高 940mの奈良井宿は中山道で最も高いところにある宿場。その宿場のはずれに標高 1197mの鳥居峠への登り口があり、石畳の山道となる。石畳道は5分程で終わり、あとは普通の山道、広くて整備されており登りやすい。

暫らく登ったところに、可愛らしい石仏があり、思わず足を停めた。峠の手前に、展望台と書かれた標識が脇道を指しており、その指示に従って5分程登ると休憩小屋があつたものの木立で周囲は視界ゼロ

可愛らしい石仏



鳥居峠の登口の石畳



1時間弱で鳥居峠に到着、車が走れる広い道があり、峠といっても周囲は林で見晴らしは悪い。一休みしていると、後から登ってきた人に追い越されたが、その人は「熊鈴」をつけている。そう言えば「熊出没注意」の立札があつたのを思い出した。

子産の栢



熊よけの鐘



軽井沢で「熊出没注意」の看板を見た時はびっくりしたが、その後何回も見ているので気にならなくなっている。

下り道に面白い形の木があり、説明板があるので見ると、「子産の栢」と書かれている。「昔、この木の穴に捨て子があり、子宝に恵まれない村人が育てて幸福になったことから、この実を煎じて飲めば子宝に恵まれる」と書いてあつた。更に下ると、鐘が吊るされており、熊よけの為に鳴らせと書いてあつたので素直に大きく鳴らした。

下りの途中にも展望台があり、そこから稜線の上に白い山が顔を覗かせているのが見える。この白い山は木曾駒ヶ岳で、通称「木曾駒」。峠道の最後は申し訳程度の石畳道で、最初と最後だけを石畳にしたのは何の為だろう？鳥居峠は奈良井川と木曾川の分水嶺で、奈良井川は東に向かって流れていたが、木曾川は西に流れており、これから先は木曾川沿いに歩くことになる。



チラリと見える木曾駒ヶ岳

山道を降りると、住宅地となる。日本人のガイドに連れられた7~8人の外人団体さんに会った、全員トレッキングの格好をしていて、これから鳥居峠越えと思われる。外人観光客が中山道を歩くのかと感心してしまった。昨今の日本観光ブームで、ディープに日本を味わいたい外人が増えてきたのか？

藪原宿 35 番目

住宅地を通り抜け、線路の下をくぐると藪原宿、贅川宿と奈良井宿は行政的には楢川村で、藪原宿は木祖村となる。因みに次の宮ノ腰宿は木曾町。木祖の村名は、木曾郡を縦断する木曾川の源流の地であることから、木曾の祖という意味を込めて名付けられた。

宿場には本陣等は残っていないものの目を引く建物がある。

旅籠の米屋



漆器の店



お六櫛の間屋



米屋の看板があるのは昔の旅籠で、今も旅館として営業している。赤い櫛の看板は漆器の店で資料館にもなっている。

六の看板はお六櫛の間屋。お六櫛と言うのは妻籠宿のお六という娘が考案したものを藪原宿の人が産業スパイとして技術を盗み、藪原で改良し商品として売り出した。

行くてに 30cm 程の小さな蛇がいて、死んでいるのかなと思って近づいたら舌をチロチロ出しながら逃げた、今年始めて見る蛇。



巴淵

巴淵

藪原宿を出て国道 19 号線を延々と歩く。時々脇道や田んぼの中も通り、既に正午となっているので空腹でもあり、どこか食堂はないのか、無ければコンビニでもと思うが、人家はあるものの店は全くない。



歩き続けて 1 時頃に宮ノ腰宿の看板の下に到着。

集落の手前で木曾川が大きくカーブして淵となっており、「巴淵」の碑と説明板がある。

巴淵の説明

蒼蒼と巴が淵は岩をかみ
黒髪愛しはとどきす啼く

木曾町

歴史が漂うこの淵は、巴状にうずまき、巴が淵と名づけられた。伝説には、この淵に龍神が住み、化身して権の守中原兼達の娘として生れ、名を巴御前と云った。義仲と戦場にはせた麗将巴御前の武勇は、痛ましくも切々と燃えた愛の証でもあった。巴御前の尊厳は再びこの淵に帰任したと云う。法号を龍神院殿と称えられ、義仲の菩提所徳音寺に墓が苔むして並ぶ。

絶世の美女巴は、ここで水浴をし、また泳いで武技を練ったと云う。そのつややかな黒髪をしたたりと乙女の白い肌元には、義仲への恋慕の情がひたに燃えていた。

岩をかみ蒼くうずまき巴が淵、四季の風情が魅する巴が淵、木曾川の悠久の流れと共に、この巴が淵の余情はみつみつとして、今も世の人の胸にひびきと伝わる。

伝説の残る巴が淵

悲劇のヒロイン、そして美女、更に武芸の達人、これだけ揃えば人を熱くするのか、この巴淵の説明板の文章を書いた人(絶対に男)の熱き思いが伝わってくる。或いは小説でも書くつもりだったのか。

宮ノ腰宿 36 番目

この宿場は木曾義仲と巴御前の故地、しかし空腹には勝てず、まずは最初にあった食堂である義仲館の前の蕎麦屋にはいり、山菜そば 770 円也で昼食、味はまあまあ、量が多かった。腹が落ち着いたところで義仲館に入館、シニア割引で入館料 250 円也。

源平の戦いは約 900 年前の出来事、当時の書面が沢山残っているのに感心した。しかし日本語なのに全く読めない、こんな古文が読めたら歴史が面白いだろうな。浅倉卓弥のミステリー小説、「君の名残を」を思い出した。現代の高校生 3 人が源平の時代にタイムスリップして、一人が巴御前に、一人が武蔵坊弁慶に、もう一人が北条政子の弟である北条義時となるもので、切ない恋を胸に秘めて歴史上の人物の役を演じきるストーリーだった。

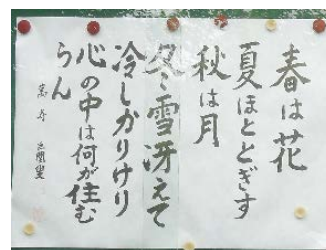


木曾義仲の墓

義仲館に飾ってある人形類や源平合戦の絵は素通りし、義仲生い立ちのナレーションもパス、足早に館内を出て徳音寺へ。義仲館のすぐ近くの山手に徳音寺があり、そこに義仲の墓がある。寺の入り口に右の「春は花」の文章が飾られていた。どこかで読んだことのある文章だったが、どこで読んだのだろうか、思い出せない。



義仲と巴御前



寺の中に「木曾義仲霊廟」と書かれたお堂があり、そこで合掌してから、階段を上がり、山の斜面にある墓に行く。ここには義仲と巴、更に義仲の四天王の墓があり、また合掌。



木曾義仲霊廟



義仲と巴、四天王の墓

宿場としては、本陣は跡を示す説明板のみ、旅籠は建物が残っていた。

宮ノ腰宿を出て、田舎道をひたすら歩く。時々、前方の山々の隙間から木曾駒の白い山頂が見える。時折、中山道を歩いている人と出会い、挨拶して離れてゆく。



旅籠田中邸

石仏群があり、右側の4体はどうみても大陸系、特に大きな2つは韓国系に見える。



間(あい)の宿の原野には中山道中間地点の碑が有り、丁度であった夫婦の旅人と写真を撮りあった。日本橋を出て9日目なので、三条大橋につくのは18日目と言うことになる。東海道は20日かかったので少し早いペースだが、まだ何があるか分からない。

また「手習天神」なるものがあり、木曾義仲を養育した中原兼遠が義仲の学問の神として勧進したものと書かれていた。



福島宿 37番目

田んぼの中の道や、林の中、農家の脇道等をとおり、国道に出て、遠くに見えていた町が少しずつ近くなり、やがて大きな門が現れ、その門をくぐって木曾福島に到着、最初にあるのは関所。



関所をはいると旧家、と言っても明治の建物、島崎藤村の姉「園」の嫁ぎ先で、園は作品「家」の「お種」のモデルであり、「夜明け前」の「お糸」のモデルと書かれていた。夜明け前を読んだのは高校生の頃なのであらずじしか記憶に無い。

中山道は街中を通っており、木曾福島は昭和のレトロな感じが残っている町で、狭い路地の飲み屋街もあり、本陣は残っていないものの、うだつの上がった旧家が軒を並べる通りもあって古い建物が多い。

福島宿の旧家



マンホールの蓋

奈良井はヤマメ、藪原は木曾川と村の花リンドウと村の木トチノキ、宮ノ腰は木曾義仲の紋の笹竜胆、福島は木曾関所。



木曾福島駅に4時半に到着、本日の歩数は6万歩。木曾福島駅から電車で松本へ、松本から高速バスで新宿帰着。

9日目

